政談戀畦倉
大西庄之助編
上之巻

○川越ハ葉牒の年号にその名を高くまづ町家ゟ大臣候が裁判ホ手家の苑ども高々恩し富ミ栄へる事
[illegible]

▲埼玉郡某宿に穀屋何某とて今都ひ恩ひ豪商ありしが大家にて住して情け深く下と善を行ふ事賞せ 内然と人も敬ひけるが夫婦が中二人の子あり長男を何某と云て今年廿一歳次女を おゆきと云て十八才容貌艶麗にして近郷に稀なる

㊟美人なれども狭のらくしき大名あらず佛家より縁談をもしかれど 見ず者の

図

A535
<48-8374>

十四郎

とくやの番頭

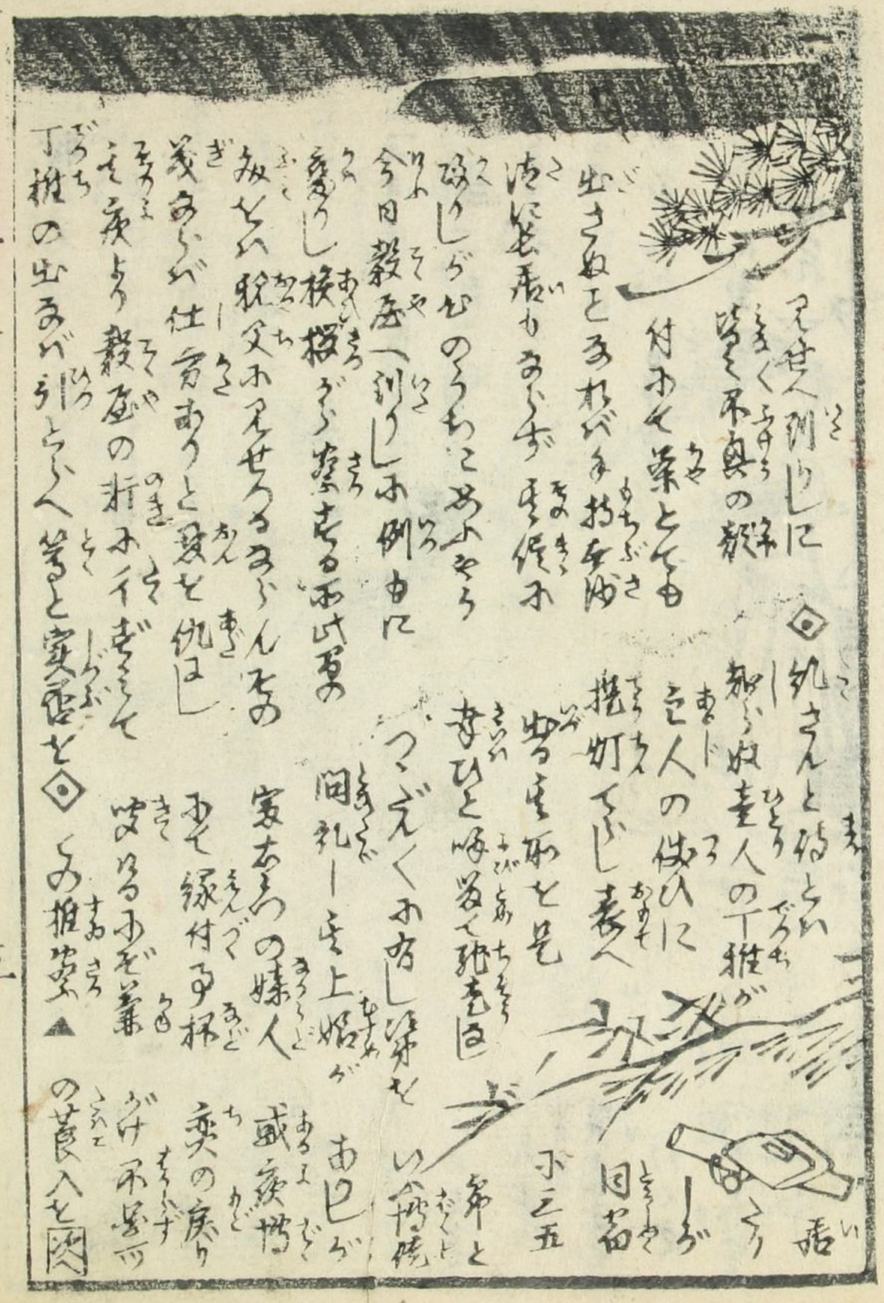
娘かるた

野倉十四郎

乳母

富士五郎

次の五の三五郎



〔ふき〕拾式宅へ帰りて改め見るに水戸に
のるべき書と」き紙に杉戸屋
家あるべき名宅あれ穀屋に来と
紀一あれば相い家あり屋の屋せ
相ぶらんおーもまく屋ーと
といふお女房
ひて逐一下走り
と立上るおかり
入来る捨奴伴
写十四郎は
みて帰れ何変
代るとと問へれ
利根川
姫ふ伯
仕せ
云ひつる変を
立
三五郎
知ーが拾ふ西
手ま来ぶ花
知を用ぶ
居うしが
二日ま
手ま来ぶ
笑者まど
行く中
を
中

て此方拾ひる
なぜこ入のるを
拾ふ十四い点形
三五郎ふ打向ひまるとべ
逐さすとも目ふ変ふい
長まびうとふと不審と
思へども金武分ふて
変流ー先生まど
何ふあらると云ふに十四い
お笑ひ長ふい涙ふ流あると
長で送服を隠ものふ
極密ふ云て他去い事有と
金を奪ひて
莫入れ紙の入しを見
殺の例く為ー亜
今宵
い彼奴
ふ吸り
屋

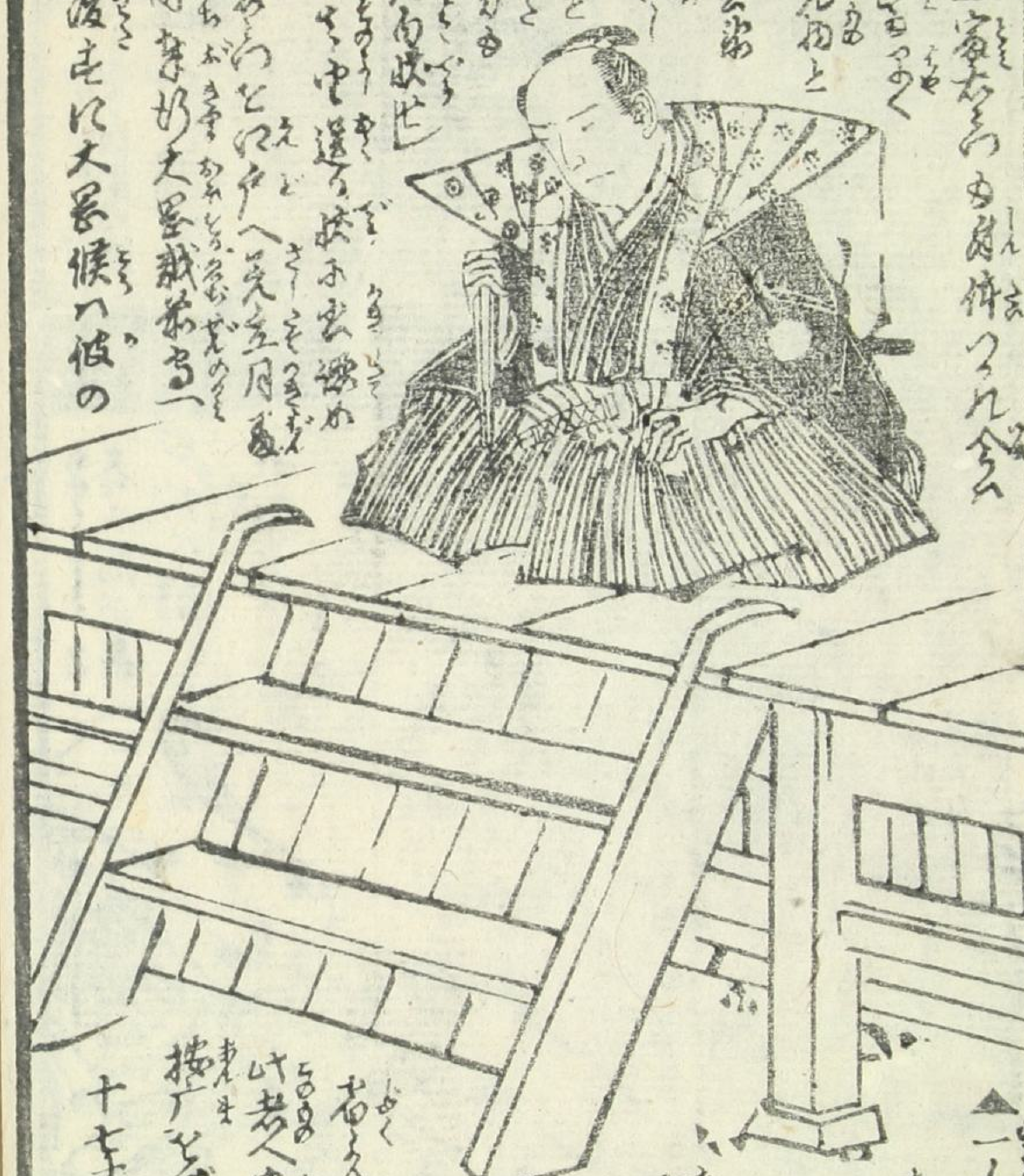
十四郎

平兵工

十四郎

平兵工

つゞき 家老内藤伊織が
菊池をつゞく
記ゆん助と
天玄蕃
を殺し
すと
まとて
役宜も
白状せ
其のうち鬼一選み次第殺め
軍かいの江戸へ発足月々
の町奉行大岡越前守へ
引渡され大岡候ハ彼の



一人の盲人
おひを十二
才の女の
江戸振袖
町柄振する
薄雪と
の盲人入
元孝子
を又
背より出し替放
此老人書き上
掛りとが事の世に
十七才のその

家老を呼出し糺明有ける
ありけるに家老の内藤と
是まで同席の妻に語へ
子等を殺しおきし事ならん
と敵方を白状に及びしと
中にて越中候ゆゑ入ふ使出し候ひし次第
とにて掛りてゐて丁度天玄蕃の殺されし事
後へ家老の内藤奉行の中にて下役辺に居たる
記して料理とよりしが一旦白状せ
る故手本を殺せし後の出されし内
貴し離しと内藤殺せし故本人の内
やそ其是を殺されしに家老の内藤が下男に

西方株 家病 死 軍天 放し 名を 誠実と 呼び 出し 用か 居かた へ

城富養母
城富

富右エ門女房

佐野鹿十郎代記
田宮坊太郎代記
鬼神阿紋白波
大江山酒呑童子
大書舞記文実説
假名手本忠臣蔵
石川五右門代記

延 延 延
延 延 延
延 延 延

人玉 兵工
清面金剛

殊に今ハ都ら収金を奪来が小唄
かくして帰りける後ろ袈
裟ハ肩先より大袈
裟に切りさげ是に不意を

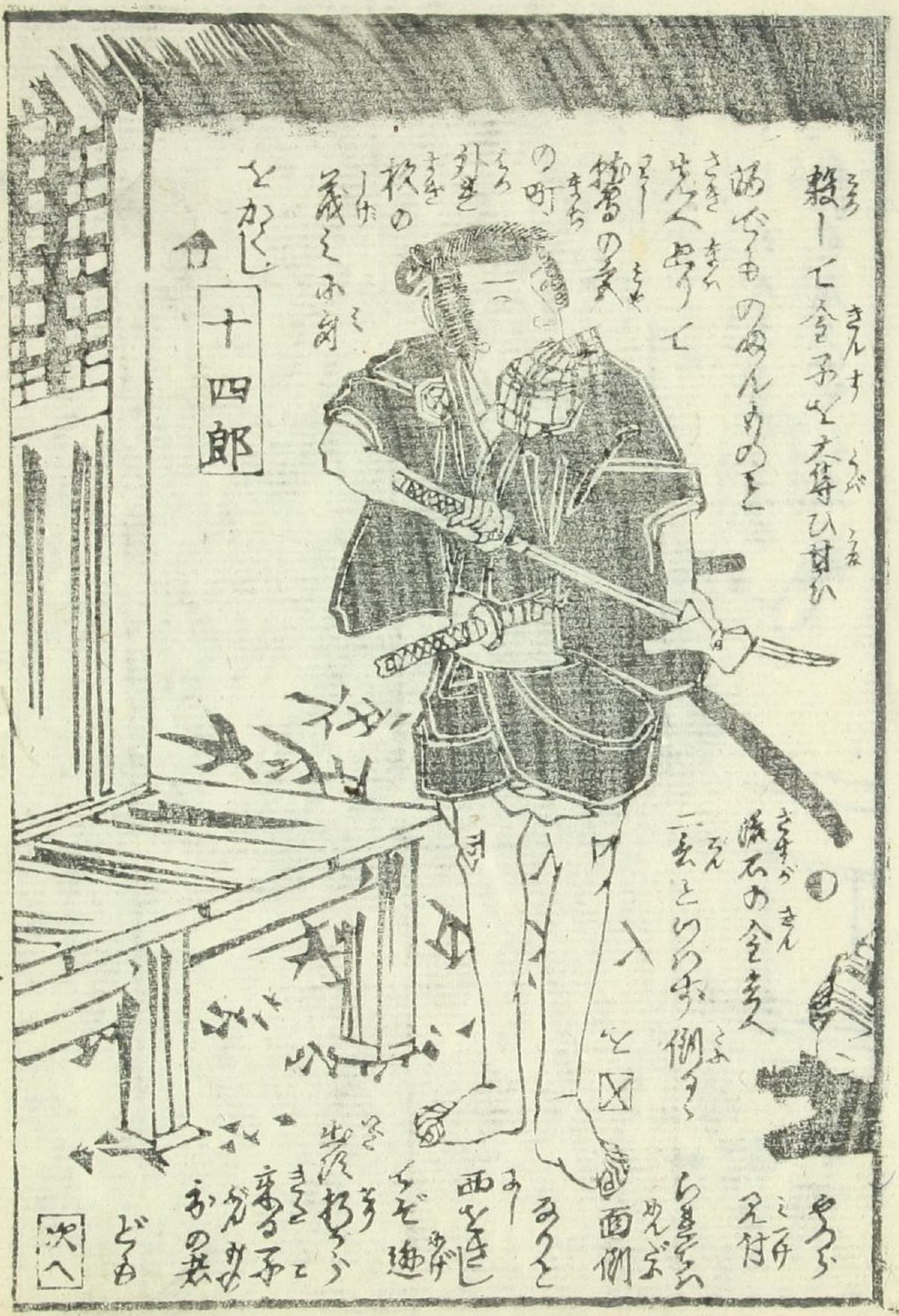
○ おれそ

つゞき

文政市村座出しハ寛保八年七月
十三日の夜なり殺月光くまなく
通り道中の人放やくに酒狂
うかし男女集ひて賑ひ張る
その頃金主来り彼金を
懐中に入れ又来りし不十四郎
ハ此体見るより忽ち
悪心を生じ彼奴を

金兵工

⊠ 後を追ってゆき
明倉へ金を
奪ひて
普請と
お笑を
提灯包
高張
人数
生々に静
まる時
那へ
不為の



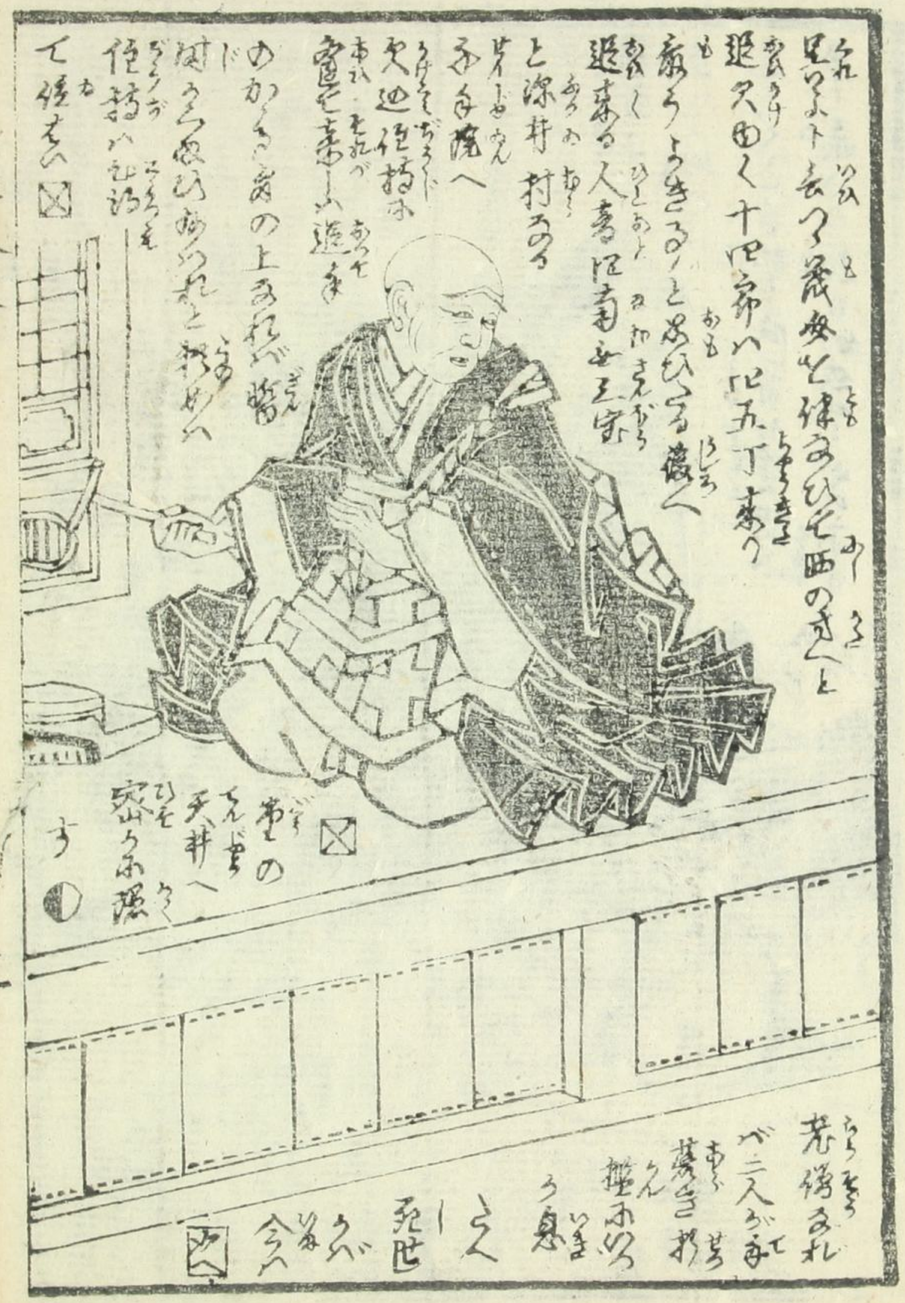
殺して金子を奪ひ其か
遍ての物のめんめんのを
先へ出やりて
鍛冶の表
の町
外堂
桜の
義と不対
とかくし

十四郎

○ 浅石の金主人
二言とはの側に
白昼
西側
あらと
西をきたし
ちぞ逃げ
出役
高声が
お前の義
どか

次へ

今去年の乱ぶいふ付たる撃きこと
何者の仕業ならう殺害致と傷りをたれば
死骸の側ふ義ある鉄扇開いたるまでべ
犯害ふ形因ニ五寸ノ紙一ありに
で揮絶へたいふ
怒うと思さす
さべ敬ふの二五寸が
仕業ふ違ん今更
彼奴ふ和達ノ一ば
決て打ん義去年生方へ
此村へ面けて死ぐのと引取
仕掛ふ向ひ
今度人を殺
して逃迯
曲者ふ成と云
ふ仕掛ふ意恨
ふ敵張と云
ふ敵ふ二人へ
恨り仕
掛を拵ら
麦問屋
六十官餅の



元禄
星ふよと云つ義安と体ふひと西の方へと
延久四く十四年ハ巳五丁来の
家うようきつのと思ひる徳へ
退来る人書仕者ふ三家
と深井村村ふの
子ふ魔へ
大迯仕掛ふ
意と来ふ遊ふ
めかくる家の上ふ行ば階
間ふ家ひあれと探めへ
仕掛ハ
て仕方
弟の
天井へ
隠ふ
す
若侍ふ
べ二人ふ
義ふ打
無ふ
息
死
今

二人ハ
承知
日月
廿九日
の後三
人揃ふ
て十四郎
が宅へ
参り委
細を語
り今
宵五郎

二人ハ稲荷の上揚屋
二人ハ新町に成て五郎ハ対
面して成られて彼が
東宮の十四郎が
跡を追ふ
彼奴と向ふ人
ハ一人の面例故
妻細を語り
助左ヱ門
彼方へ
と行ける
とあるに
次ハ

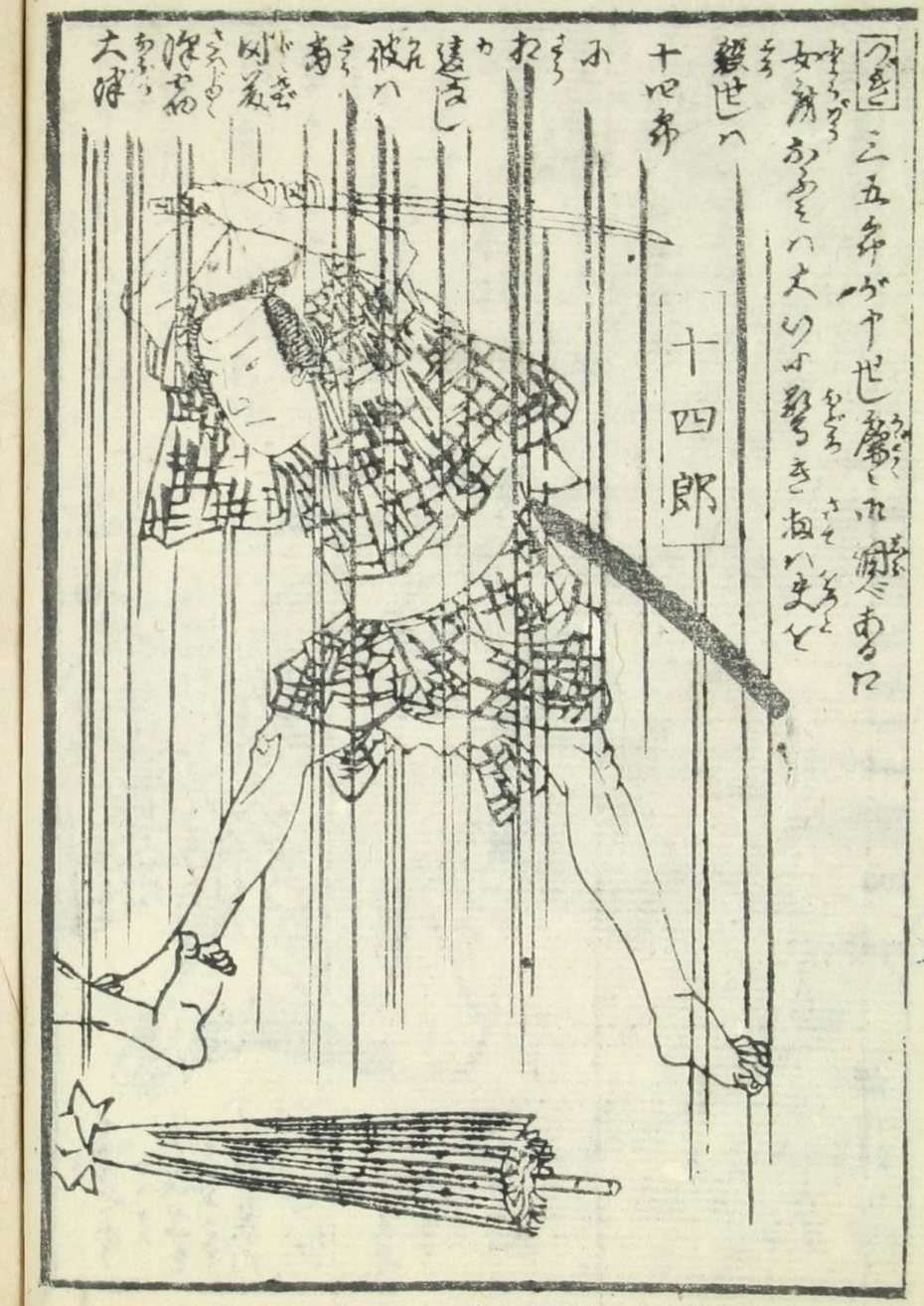
茂助
藤兵工
かもん
十四郎
三五郎

一十四郎
掃部

藤兵工
茂助
三五郎

十四郎

飛脚



つぎ　三五郎が十世孫と称する
女房あるをハ大いに怒り海ハ夫と
殺せハ
十四郎
ホ
ね
か
遠き
彼ハ
者
刈羽
海者
大津

風呂
ちかつと
ゑんるハ
ゑ者の時ハ
十四郎
ゑそれと
ゑ假殺や
ゑ来と殺せ
ゑ
金ゑ来と
殺せ
十上ゑ
次へ

つゞき

[illegible]

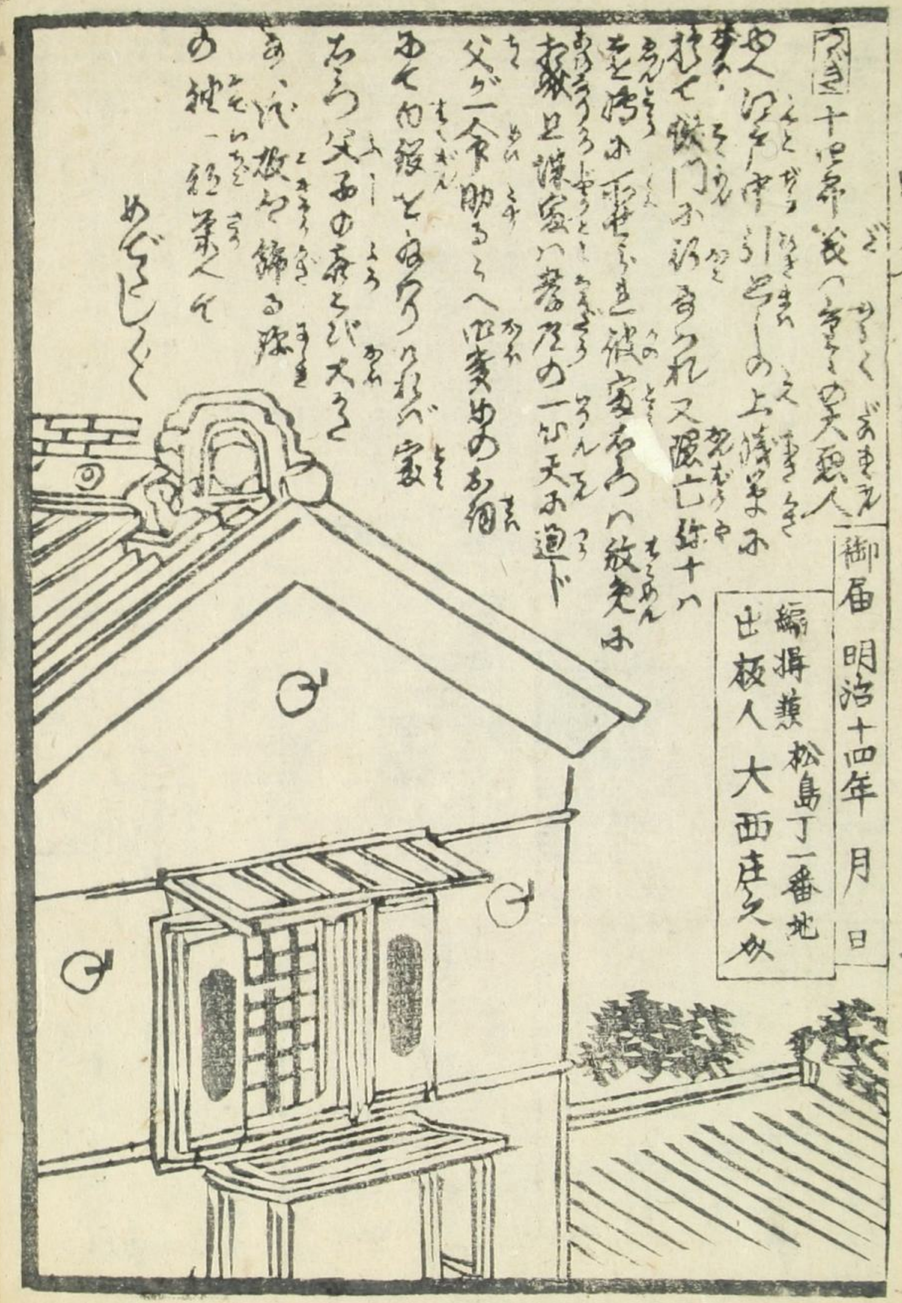
[illegible]

[illegible]

城富
富右エ門

十四郎

010190514027



十四年義人の大恩人
史記中引用の上諫書
於て獄門に処せられ又陽亡後十八
年を待て復家を興し義人の故を
表し旦藩家に書を乞の一句天を迫ド
父が一命助るべき哀めの為
あの殺とあらりの家
あらう父あの赤とび大ろ
あ、代故を錦る孫
の独一級第人を
めぐらしく

御届 明治十四年 月 日
編輯兼出板人 松島丁一番地 大西庄次郎

橋本屋書店 仏野原 田宮坊太郎代記
上閘丁 都谷崎
鄙島梅沢 津田
順子 熱田門波嶋門
天神記 義経桜梅
大盡舞 紅文実録
殺名手本忠臣蔵
石門五右門代記
書物問屋 東京日本橋区松島丁一番地
版本 出版者 大西庄次郎

延 延 延
延 延
延 延 延